

文学研究とロゴセラピー

—「世界が綺麗に見える」ようになるまで—¹

倪楽飛

序 あるお婆さんとの出会い

先週日曜日に、私はついに博士論文を完成しました。もう大分延ばしてきましたが、ようやく修了するための最後の流れに入りました。ゴールが見えてきて、少しホッとしました。

論文の最後のピリオドを打った後、気分転換でもしようかと思って、私は自転車で散歩に出かけました。広い畑の間の細い小道を走って、熱風に髪の毛を吹かれて、遠い山々を眺めて、私はふいに孤独感に襲われました。すぐ誰かと話したい、やっと博士論文が完成した、と。また、誰かの笑顔を見たい気持ちもあったのです。どこに行ってもマスクしか見られなくて、笑顔どころか、どういう顔なのか、どういう表情をしているかさえもわからなくて、内心では凄く、人の笑顔に飢えていました。もちろん、友達に会いに行けばいいですが、すぐにはさすがに難しいでしょう。でも、一人だけでもいいですから、やはり話し相手が欲しいな、と心の中で願いました。友人の中の誰かにメールでもしようかと思っていたところに、前の畑に、農作業をしている一人のお婆さんがいました。そのお婆さんに近づいて、私はうなずいて、「こんにちは！」と挨拶をしました。

私が住んでいる東広島市西条、特に広島大学の周辺地域は、基本的に田舎なので、スーパーとかじゃないところでは、人がかなり少ないです。以前からそうだったし、コロナの影響で、今は益々外に出かける人が少なくなりました。なので、道で誰かと会ったら、別に知り合いじゃなくても、「おはよう」とか「こんにちは」と挨拶するのが私の習慣となっています。ほとんどの場合、向こうも同じ「おはよう」とか「こんにちは」と返事をしてくださいます。

しかし、私がお婆さんに「こんにちは」と挨拶したら、お婆さんは「こんにちは」ではなく、「お兄ちゃん、トマトあげようか」と言いました。私は聞き間違いかと思って、「えっ」と返事しましたが、お婆さんはもう一度「トマトあげようか」と言いました。